

平山 雄一（ひらやま・ゆういち）先生

音楽評論家

1953年、東京生まれ。一橋大学社会学部卒。

78年より音楽評論活動を開始。

J-POP、J-ROCKをはじめ、ヒップホップ、ジャズなど
カバージャンルは多岐に渡る。

忌野清志郎、サザンオールスターズ、佐野元春、BO WY、
ユニコーン、スピッツ、DREAMS COME TRUE、MISIA、hide、
くるり、奥田民生、アジアンカンフージェネレーション、
サカナクションなどと親交がある。

フィールドワークに徹底的にこだわり、今まで観たライブは
4800本以上、インタビューしたミュージシャンは2000人以上。
音楽雑誌、web、テレビ、ラジオを通じて、新しい音楽の動きを
いち早く紹介してきた。音楽と社会の関わりに強い関心を持つ。

現在は毎年、夏と冬に、大人のリスナーのためのイベントのキャスティングを行なっている。



〈講義概要〉

音楽評論家としてJ-POP創成期から音楽シーンに携わり、音楽雑誌、Web、テレビ、ラジオ等様々な場で活躍している平山雄一氏が、「弱虫のロック論 弱虫が歌うロックだからこそ魅力がある」をテーマに講義を行った。

講義ではまず、「弱虫の歌うロックの魅力」について、「かつて弱虫で辛い経験をした、弱虫の心の分かるアーティストの書く歌はリスナーの共感を呼ぶ」と解説し、様々なアーティストを35年間見守り続けてきた平山氏の音楽への熱い思いを伝えた。

続いて、アーティストからのメッセージ動画や1ヶ月のスケジュールを提示しながら音楽評論家の仕事について具体的に説明。その中で、自分の感性でコンテンツを作るタイプと、自分の好きなコンテンツを批評的な見方で捉え、分析、解体し、再構築して新しいコンテンツを作り上げるタイプの2つがあると解説し、後者の評論的な見方の重要性を示した。

さらに、デジタル時代における音楽産業の抱える問題点について指摘し、インターネットが音楽産業において有効となるような、音楽を作る人と楽しむ人たちの新しいルール作りが必要であり、それを音楽を享受している若い世代の人々に考えていって欲しいと訴えた。

デジタルネット社会における音楽産業のあり方を考察する上で大切な考え方を示す講義となった。

《受講生の感想》

辛い経験をしたことのある「弱虫」でないと良いものは作れないという言葉に共感しました。音楽の新しい世界・聴き方を提供するお仕事は素敵だなと思いました。今の音楽業界のあり方もインターネットの進化に従って変容していく必要を感じた。批評的な考え方、ものの見方は社会に出ると必要な力であると思う。それを音楽に対して行う平山先生のお話しは説得力があり、実践したいと思いました。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

平山先生の音楽に対する考えから、今後、若者に求めるものや音楽業界に今必要なものまで、幅広いお話を聞くことができた。平山さんの話を聞いて、アーティストとリスナーがフェアな状態で情報交換できる場というものを考えてみようと思った。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

一番印象に残ったのは、コンテンツを作る人は2種類で、1つは自分から溢れ出てくるアイデアとかを形にしていくのと、もう1つはコンテンツを分析して、自分だったら社会にどうプロデュースしていくかということを再構築していくやり方の2種類あるということでした。僕はコンテンツ制作をしていきたいと思っているので、とても勉強になりました。

立命館大学・映像学部・2 回生

弱虫だった過去があったからこそ、その時の自分に対して、また、同じ悩みを抱えるリスナーに対して、良い歌を作ることができるというお話しがとても興味深かったです。時代の変化に対する新しいコンテンツへの考え方、ルールを設定することが大事だということをお忘れずにいこうと思います。

立命館大学・産業社会学部・2 回生

音楽産業の移り変わりや音楽のデジタル化による利便性の向上など、今日の音楽産業の様子がよくわかった。そしてデジタル化による利便性の向上から、音楽産業が衰退しつつある今、新しいルールを作り、業界を再構築できる、次の若い世代に対する平山さんの期待がとても伝わってきた。新しいルールを作るためには広く世の中を知り、様々な価値観を持つ必要があると分かり、私も何か新しいことを始めようと思った。

立命館大学・産業社会学部・3 回生

「弱虫の歌うロックだから、大勢の人に支持される」という言葉に胸を打たれました。「弱虫の心が分からない人には良い詞が書けない」という言葉が印象的でした。音楽家に寄り添って音楽家の声を聞くというお仕事だと思います。今までとは違う音楽の聴き方、感じ方をすることがとてもクリエイティブな作業なのだ分かった。

立命館大学・映像学部・4 回生

